

日・英語会話におけるトピックの発展と聞き手の役割

Topic Development and the Role of the Listener in English and Japanese Conversations

岩田祐子

国際基督教大学教養学部

Abstract

Personal narrative is ubiquitous. Ochs and Capps (2001) state “when people are together, they are inclined to talk about events - those they have heard or read about, those they have experienced directly, and those they imagine.” Conversational narratives are neither planned in advance nor told only by the tellers. Storytelling “cannot be postulated *a priori* but emerge as a joint venture and as the outcome of negotiation by interlocutors” (Georgakopoulou, 2007).

Connected to these ideas, this study focuses on listener-involvement strategies to promote speakers to tell stories in English and Japanese conversations respectively. It also investigates how listeners try to elicit stories from speakers and how listeners jointly co-narrate stories with speakers. In the study, twenty, first-encounter conversations that took place between three male speakers in Japan, the United Kingdom, the United States, and Australia (five conversations in each country), were video-recorded, transcribed, and analyzed. Results reveal that topics are well developed in some conversations and less developed in others. As a result, conversation topics are frequently changed. This tendency is shown both in English and Japanese conversations. The detailed analysis indicates that when topics are well developed, listeners not only backchannel but also make predicting comments and ask questions to elicit more information from speakers. In addition, listeners sometimes take speakers’ roles and tell second stories (Schegloff, 1992) relating to the speakers’ first stories. Consequently, speakers and listeners co-narrate stories and topics are well developed. On the other hand, when topics are not well developed, listeners tend to backchannel and ask clarification questions to encourage speakers to tell stories but they rarely ask questions to seek further information or tell second stories themselves. In these cases, topics are not well developed in either English or Japanese conversations.

1. はじめに

英語会話においても日本語会話においても、たとえ初対面であっても様々なトピックが展開される。ただ、話し手と聞き手が協同して一つのトピックを発展させる会話もあれば、トピックがあまり発展せず沈黙が入り、沈黙を打開するために新しいトピ

ックが導入され、結果として頻繁にトピックが変わる会話もある(岩田 2015a, Iwata 2015b, 2015c)。この違いはどこから来るのだろうか。本稿では、聞き手の役割に焦点を当ててトピックの発展に寄与する聞き手の関与とはどのようなものかを分析する。

## 2. 会話における聞き手の役割

会話は話し手だけで作るものではなく、聞き手の役割が大きいと言われる。たとえば Duranti (1986)は、the audience as co-author という表現を使って、会話において聞き手は話し手と共に会話を作るのだと主張した。また Goodwin (1986)は、聞き手の反応が話し手による語りの語られ方を形作ると述べている。会話において話し手が語る語りに、聞き手がどのように貢献するのかの方法としては、主に次の5つが考えられる。第一に、聞き手が話し手の誰かを語りに誘うことである。第二に、話し手の語りを聞き、時々コメントを言うことである。コメントの中には、先取り発話と呼ばれるものがあり、先取り発話とは、田中(1998: 17)によれば「相手の発話が完全に終わらないうちにその発話内容を予測し、それに関わりのある何らかの言語表出を行うという行為」である。第三に、笑いや共感を示すことで、もしくは積極的なあいづちによって、話し手の語りへの感謝を示すことである。第四に、話し手が語りに対して示している評価とは異なる評価を示すことで語られた話の意味を交渉することである。第五に聞き手が話し手になり、より積極的な役割を果たすことである。この場合は、話し手の語りに詳細を加えたり、一部を修正したり(Goodwin 1979; Lerner 1992; Madelbaum 1987; Manzone 2005)、話し手とデュエットするかのように話を共に語ることもある(Mulbohand 1996)。また聞き手が話し手になって話し手の語りに関連した story を語る、すなわち Sacks (1974)が提唱した second story とも呼ばれるものである。また Tannen (1989)が提唱する聞き手が、話し手や第三者の「声」の引用をすることで話し手と疑似対話(constructed dialogue)を構築し、語りを協同構築することが挙げられる。

## 3. 会話データ

本稿で使用したデータは、男性三人の初対面会話である。参加者はいずれも大卒以上の学歴がある大学院生もしくは社会人である。二十代が主だが、三十代～五十代の参加者も少数含まれる。場面設定としては、招かれたお宅でパーティに参加しているときにホストがキッチンに席を外し、その間、初対面同士で話をするようになったというもので、ビデオ収録までは互いに会話をしないようにしてもらい、30分の自由会話を行ってもらった。日本語母語話者による日本語会話5本は日本で収録し、英語母語話者による英語会話は、イギリス(ロンドン・マンチェスター・オックスフォード)・アメリカ(オースティン、テキサス)・オーストラリア(シドニー)で5本ずつ収録した。<sup>1</sup> 収録した会話を文字起こしし、分析した。

## 4. 分析1：日本語会話・英語会話のトピック数と特徴

日本語会話と英語会話それぞれをトピックごとに区切り、それぞれの会話におけるトピック数を数えた。その際に、三牧(1999: 175)の話題の定義、すなわち「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事例の集合体を設定し、その発話の集合体に共通した概念を『話題』とする」を参考にトピックごとに会話を区切った。また三牧(1999: 175)は、「話題はさらに派生話題をもった構造を示すことも」多いとし、大話題一小話題を提唱している。しかし、本稿では、Sacks (1974)の first story, second story の考え方を参考にトピックの発展を論じることとし、一つのトピックから派生・発展するトピックは別のトピックとして扱った。

下記の表1～表4が示すように、日本語会話においても英語会話においても、一つのトピックが発展している会話とトピックがあまり発展せず、頻繁に新しいトピックが導入され、結果として全体のトピック数が多い会話とがあることがわかった。

表1 日本語会話

会話コード <sup>2</sup>	会話参加者コード <sup>2</sup>	トピックの数	特徴
JP17	J24, J25, J26	13	専門の話のみ。自己開示少ない。
JP65	J39, J41, J42	12	主なトピックは社会現象。
JP69	J34, J35, J43	16	一人は主な話し手。後の二人が聞き手。first story→second story→ third story
JP72	J33, J39, J43	11	一人は主な話し手。後の二人が聞き手。頻繁なあいづち。予測コメント。話し手への質問。
JP73	J33, J35, J39	12	3人の会話への関与が平等。予測コメント。

日本語会話では、トピック数には大きな違いが見られないが、JP69 と JP72 にトピックの発展の仕方と聞き手の関与において特徴が見られる。

表2 アメリカ英語会話

会話コード	会話参加者コード	トピックの数	特徴
US31	U1, U2, U3	10	トピックが発展している。聞き手の役割（意見、関連ストーリー、予測コメント、質問）。自己開示が大きい。
US35	U3, U5, U7	23	トピックの発展が見られない。
US36	U2, U8, U9	26	頻繁にポーズが入り、その後

Topic Development and the Role of the Listener in English and Japanese Conversations

			新しいトピックが導入される。一つのトピックが短い。
US39	U8, U11, U12	23	トピックが頻繁に変わる。
US40	U7, U9, U11	21	頻繁なポーズ。ポーズの後に質問が入り、新しいトピックが導入される。意見が表明されない。自己開示小さい。

アメリカ英語会話では US31 が、トピック数が少なく、一つのトピックが発展したことがわかる。

表3 イギリス英語会話

会話コード	会話参加者コード	トピックの数	特徴
UK26	B1, B2, B3	22	自分たちの専門とその関連について。
UK28	B5, B6, B7	24	知識の提示（例、映画、コメディ、俳優について）
UK54	B11, B17, B18	20	自分たちの職業とそれに関連した社会現象と問題点
UK57	B21, B22, B23	10	予測コメント、質問、関連ストーリー
UK58	B21, B24, B25	11	職業について。一人の話し手と二人の聞き手（あいづち、関連ストーリー、質問、コメント）

イギリス英語会話では、UK57 と UK58 のトピック数が少なく、一つのトピックが発展したことがわかる。聞き手がトピックに様々な形で関与し、トピックの発展が見られる。

表4 オーストラリア英語会話

会話コード	会話参加者コード	トピックの数	特徴
AU43	Au4, Au6, Au7	13	話し手の意見表明とそれに対する聞き手からの反論。自分の意見を支える証拠としての体験談の語り。first story→second story
AU45	Au9, Au10, Au11	19	体験談に終始。意見表明なし。
AU46	Au6, Au10, Au12	15	言語やコンテキストについてのディスカッション。知的会

			話。
AU47	Au5, Au12, Au13	18	詳細な自己紹介。コメント。
AU48	Au8, Au11, Au14	18	意見表明。

オーストラリア英語会話では、AU43 の会話が、トピックが発展しており、聞き手の関与に特徴が見られる。

## 5. 分析2：トピックが発展する会話における聞き手の役割

次にトピックが発展している会話とトピックが発展していない会話の特徴を、英語会話・日本語会話それぞれにおいて聞き手の役割に焦点を当てて分析した。

### 5. 1 トピックが発展している英語会話

紙幅の関係でトピックが発展したすべての会話をここで分析することはできないが、その代表例として UK57, AU43 を分析する。

#### 5. 1. 1 聞き手側からの関与：質問と先取り発話

以下のイギリス英語会話 UK57 では、参加者の一人 B21 が教育心理学専攻の博士課程在籍中の院生であることから、彼の将来の職業が話題となっている。

##### (1) イギリス英語会話 UK57 からの抜粋 No. 1

01 B22: Sure, but what is it that you are trying to improve? (質問)

02 B21: Uh

03 B22: Is it the relationship between the children and the teachers? (質問)

04 B21: Relationship is always the key one, but just really like there isn't, I think one of the

05 main ones is flow of information happening between different professionals involved

06 B22: Right. (あいづち)

07 B21: because everybody has a different idea of the situation or the problem.

08 B22: So between the teacher and... (先取り発話)

09 B21: And, and like other professionals

10 B22: other professionals, right. (繰り返し)

11 B21: and the child.

上記の会話では、B21 が将来 educational psychologist になると答えた後、聞き手の一人である B22 が educational psychologist の仕事内容について 01 行目で「何を改善しようとするのか」と内容に踏み込んだ質問をしている。さらに 03 行目で「子供たちと教師との関係（を改善するの）か」とこれも内容に踏み込んだ質問をしている。それに対し、04~05 行で B21 が、「関係も大事だが、(改善を目指すのは) 異なる専門職の間の情報の流れが主である」と答えている。さらに 07 行目で B21 は「(関係者) 皆が、状況や問題についてそれぞれ異なる考え方をしているからね」と補足している。これに対し B22 は 08 行目で「つまり、(関係改善は) 教師と」と先取り発話を行い、

B21 のさらなる発話を促し、B21 はそれに答える形で「(教師と) 他の専門職の人たちだよ」と答えている。さらに 11 行目で「子供たち (との間の関係だよ)」と答え、彼の将来の仕事は、教師や他の専門職と子供たちとの間の関係を改善することが仕事であるとわかる。この一連のやり取りの中で、聞き手である B22 の質問や先取り発話は、B21 の語りへの関心を示すと同時に、B21 のさらなる語りを促す機能を果たしている。B22 は B21 と共に B21 の語りを、会話を通して構築していると言える。

5. 1. 2 聞き手側からの関与：聞き手からの関連ストーリー

上記の UK57 の抜粋のすぐ後に、もう一人の聞き手である B23 が B21 と B22 のやり取りに関連したストーリーを語っている部分が以下である。

(2) イギリス英語会話 UK57 からの抜粋 No. 2

01 B23: I met a mother the other day whose daughter, she's got quite a lot of serious

02 problems she's autistic and so on, at school she's selectively mute.

(関連ストーリー)

03 B21: All right, OK.

04 B23: So, she talks fine at home, but at school she won't say a word (関連ストーリー)

05 B22: Uhm.

06 B23: and hasn't done for (関連ストーリー)

07 B21: Wow.

08 B23: years. I mean she is in special school obviously but they think that's quite hard.

(関連ストーリー)

09 B21: That is, yeah, (B23 @) so you tend to get like the children, you know you don't see

10 the ones that are doing really, really well,

11 B22: Uhm.

12 B21: and it is usually the ones that are struggling for whatever reason.

上記会話で、聞き手であった B23 が「娘さんが深刻な問題を抱えているお母さんに先日会った、娘は自閉症で学校では全くしゃべらない」と話を切り出す。B21 があいづちをうちながら聞く間、B23 は「家では話すんだ、でも学校では一言も言わない、何年もそうなんだ。特別な学校に通っているけど事態は大変だ」と続ける。この話を受けて 09~10 行で B21 は、「(educational psychologist は)このような子供たちを相手にするんだ、学校でうまくやっているような子供たちを相手にするわけではない」と答えている。さらに 12 行目で「いかなる理由であろうと苦しんでいる子供たちが相手だ」と答えている。B23 の関連したストーリーが引き金となって、B21 がさらに自分の将来の職業について詳しく語っている。質問や先取り発話だけでなく、このような話し手の語りに関連した内容の関連ストーリーを聞き手が語ることも、話し手の語りをさらに促すことになり、その結果、トピックの発展を助けていると言えるだろう。

5. 1. 3 聞き手側からの関与：「声」の引用による会話の構築

以下のオーストラリア英語会話 AU43 では、Au4 が主な話し手となって、平等と思われるオーストラリア社会が決して平等ではないという意見を述べている。

(3) オーストラリア英語会話 AU43 からの抜粋

01 Au4: I think what's striking about Sydney when I first moved here is the fact that  
02 whenever you meet someone at university for the first time, they always ask you  
03 which high school you went to.

04 Au7: Yeah. (あいづち)

05 Au4: And they attach a great deal of importance to the high school that you went to.

06 Au7: I think it's actually pretty good being from out of town for that reason (コメント)

07 Au4:[ Right]

08 Au7: [because] I mean I didn't go to like flash high school in Adelaide. It wasn't a  
09 terrible one either, but I'm kind of glad that I don't – just I don't have to talk about  
10 it. (関連ストーリー)

11 Au4: Yeah, you don't fit into the hierarchy.

12 Au6: Kings? You didn't go to Kings? @@ (聞き手による会話の構築—「声」の引用)

13 Au 4: Yes, yes, yes. @@ I had experiences like that in the first year. I would meet people  
14 and I would tell them that I was living in – in the inner west, which is not even the  
15 west, but it was still not the east or the north. And immediately after I said that,  
16 they would be decidedly less interested in talking to me @@@

Au4 は自分の意見を支える証拠として様々な体験談を語っているのだが、上記の会話でもシドニー大学に入って最初のころ、どこに行ってもどの高校出身なのか聞かれたということを語っている。そしてシドニー大学の級友たちは、どこの高校に行ったかに大変な価値を置いていると述べている。これに対し、聞き手の一人 Au7 が 06 行目で「だからシドニー以外の出身ということはとても都合がよいんだ」と Au4 の語りに関連したコメントを言っている。さらに Au7 は 08~10 行で「自分はアデレードの有名高校には行かなかった。しかしダメな高校に行ったわけでもない。(シドニー出身ではないので) こういうことを言わなくてよいというのは嬉しいよ」と自分自身の気持ち語っている。これはいわば、UK57 の B23 の関連ストーリーと同じ働きをしていると言ってよいだろう。この関連ストーリーが、的が得ているからこそ 11 行目で Au4 は「(出身高校の序列という) ヒエラルキーの中に入る必要がないからね」と述べている。この後、もう一人の聞き手 Au6 が“Kings? You didn't go to Kings?” (キング高校? キング高校出身じゃないの?) と発言しているが、これは Au4 や Au7 が実際に大学入学時に体験したであろう場面を相手の言葉(声)を引用することで再現しているのである。こうした「声」の引用は、Tannen (1989)が「創作対話(constructed dialogue)」と呼ぶところの虚構的・擬似的な「声」である。こうした聞き手が先導する心の「声」の引用は、聞き手が話し手の話す内容に共感していることを示し、また

聞き手が話し手の語りの構築に貢献していると言える。聞き手の「声」の引用を受けて13行目でAu4は「一年生の時実際そう聞かれたよ」と答えているのである。Au4は続けて、「自分が西部の内陸部出身であることを相手に告げると、瞬く間に相手が自分と話をすることに興味を失った」と体験談を述べている。ここではAu4が、オーストラリア社会は平等ではなく、社会経済的にも文化的にもワーキングクラスと中流階層との間には明確な溝があるという意見を自ら体験談を語ることでサポートしようとしている。聞き手であるAu7は関連ストーリーを語り、Au6は架空の「声」の引用をすることで話し手Au4と擬似的対話を構築している。ともにAu4の語りに聞き手として参加し、語りが発展することに貢献すると同時にAu4の語りへの共感を示している。

## 5. 2 トピックが発展していない英語会話

以下の会話は、テキサスに住む三人の院生の会話を収録したものであるが、この会話は頻繁にポーズが入り、そのたびに新しい質問が誰かから発せられ新しいトピックが始まるという特徴がある。なぜ一つのトピックが発展しないのか。その理由の一つは聞き手側の関与の仕方にあると思われる。

### (4) アメリカ英語会話 US40 からの抜粋

01 U7: You were on the North East coast? How long were you about?

02 U9: Uh-huh. Three years. I was in Philadelphia and DC.

03 U7: Yeah, it's working out there.

04 U9: Yeah working, exploring new cultures.

05 U7: Yeah, how did you like it out there? (質問)

06 U9: I loved it, I loved it. It's great, very different places than – than Texas. You know

07 Philadelphia is very, you know, the culture like the people are more fast-talking.

08 They just talk faster by nature than people here. It's a little less laidback than Texas.

09 Uh and then, like in Texas you come up to somebody, hey, what's going on? How

10 you're doing? You know you can say howdy to somebody you don't know, you,

11 on a street or something, just see what's going on you know. Up there it's really

12 kind of like a screen between people. You know it's like very – very much like a you

13 know, do I know you? No. Okay. Don't (@) talk to me; (U7, 9 @) don't bother

14 me. Almost show respect for people by not acknowledging their existence.

15 Whereas here, you pass them on a street, hey, how are you doing, howdy, you know

16 kind of stuff like that. So actually, in Philadelphia, it's kind of the flip side.

17 However, once you get to know somebody there – I mean you're in, so and it's like,

18 okay, all right. You know they're real – real nice and real, you know, friendly kind

19 of deal so, that's good.

(pause)



20 U7: How long were you in DC? (質問)

21 U9: A year and a half.

22 U7: Year. I like DC a lot. (コメント)

上記会話の直前のトピックは、大学時代にやっていたスポーツであり、U9 が大学時代ラクロスをやっていたと述べている。その後、U7 はそのことには全く触れずに、U9 に対し、「東海岸の北の方に住んでいたんだよね？どのくらい住んでいたのか」と 01 行目で質問をしている。これに対し、U9 が三年間だと答えると、U7 は「どうだった」とまた質問をしている。すると U9 は、06~19 行でかなり詳しくテキサスの人々と比べながらフィラデルフィアの人々の様子を述べている。フィラデルフィアの人々の方がテキサスの人々より話し方が早いとか、テキサスの人々は見ず知らずであっても”what’s going on? How you’re doing?”と話しかけるが、フィラデルフィアの人々は間にスクリーンがあるように感じた、話しかけないでくれという様子だったと述べている。テキサスの人々とフィラデルフィアの人々ではコインの反対側のようにまるで違うと述べている。しかし、フィラデルフィアの人々もいったん親しくなり仲間として認めると、とても良い人たちだったと述べ、東海岸の人々と南部の人々との気質の差を自分の体験を踏まえて述べている。初対面でもどンドン話しかけるテキサスの人々の気質と、初対面では壁があるが、一度心を開いたら感じの良いフィラデルフィアの人々の気質というトピックは、どのようにでも発展していけそうである。ところがこの後、ポーズが入り、聞き手である U7 と U11 は全くコメントもせず、自分の意見も述べていない。この空白と反応のなさは、U9 の話に関心がないと見なされるだろう。ポーズの後、20 行目で U7 がした質問は「ワシントンにはどれくらい住んでいたのか」と U9 の 06~19 行の語りには全く触れない表面的な質問である。この後 22 行目でも U7 は「ぼくはワシントンが好きだ」という非常に短いコメントを言っているだけである。これではトピックが発展しようがない。聞き手からの関与として質問をすることが挙げられるが、単に表面的な質問をするだけではトピックの発展に繋がらない。上述の会話(1)UK57に見られるような内容を深く理解し、話し手の語りをさらに促すような質問が必要なのである。

### 5. 3 トピックが発展している日本語会話

次に日本語会話における聞き手の役割とトピックの発展を分析する。トピックが発展した日本語会話 JP69 は、大学院生 3 人の会話である。J43 が大学入学時の自分の体験を語っている。

(5)日本語会話 JP69 からの抜粋

01 J43: 特に、T 工業大の中でも特に、情報系の人達って、あの一、人としゃべんな  
02 いんですよ。

03 J34: [ああー。] (あいづち)

04 J35: [あ、そう] なんですか？うん。(あいづち)

- 05 J43 : 人としゃべれないし、何だろうな？あの、ほんとに、パソコンだけが友達  
06 みたいなやつが [聞き取り不能]  
J35・J34 : [@@]  
07 J43 : っていうのを大学入って見て、<前歯のすき間から息を吸い込む音>間違えた  
08 かなあーとか思って。  
一同 : @@  
09 J35 : 若干思ってたのと違ったみたいな。@@ (「声」の引用)  
10 J34 : ちょっとおかしかった。@@ (「声」の引用)  
11 J43 : 噂には聞いてたけど、こんな人ほんとにいるんだみたいな人がけっこう [い  
12 てー、]  
13 J35 : [あー。] (あいづち)  
14 J34 : へえー？ (あいづち)  
15 J43 : 最近はでもわりと、あ、おもしろい人だなあぐらいに思うようになったで  
16 すけど。  
17 J34 : あー。(あいづち)  
18 J43 : や、入ったときはもう衝撃で、  
J35 : @@  
19 J43 : こいつ何しゃべりかけたら俺に話しかけてくれんだろう、[みたいな。@@]  
J34 : [@@]  
20 J35 : それでけっこう初めー、その、なんか学科というか、その中の間ではー、友  
21 達が、作りにくかった感じですか？ = (質問)  
22 J43 : 作りに、やっぱ、作りにくくて、できた友達もー、  
23 J35 : うん。(あいづち)  
24 J43 : なんだ、5、6人で、最初に、固まってたんですけど [やっぱ] みんな、  
25 J35 : [は [い。] (あいづち)  
26 J34 : [おー、おー、] (あいづち)  
27 J43 : がーがー、がーがー、うるさい、やつらで=  
28 J35 : うーん。(あいづち)  
29 J43 : だから授業中後ろで俺ばーって、しゃべって、  
30 J35・J34 : @@  
31 J43 : おい、とか言われてたんですけどー、(.) なんかほんとに、さい、初めて  
32 最初=  
33 J35 : うん。(あいづち)  
34 J43 : 隣に席になったやつは、もうほんとにパソコンと友達みたいな人で。=  
35 J35 : もうちょっと=  
36 J34 : ああ。(あいづち)  
37 J35 : パソコンとしゃべってるから話しかけないって@@ [話ですか？]

(「声」の引用、質問)

38 J43 : [ほんと、そう] それで、ちょっとあの普通の、話、メシ、何 [食べる?]

39        みたいなこと言っても、

40 J35 : [ああ。] (あいづち)

41 J43 : うん、メシ、あいい、行かない、[みたいな] [聞き取り不能]で、

42 J34 : [@@]

43 J43 : で、

44 J34 : パソコン? (先取り発話)

45 J43 : パソコンで。で、プログラムの [話とかを、]

46 J35 : [うん、うん。] (あいづち)

47 J43 : これ分かんないんだ、けどって聞くと、もうものすごいニコニコして [聞き取り不能]

48 J35・J34 : @@

49 J43 : お、おお、[みたいな。@@]

50 J34 : [そう [聞き取り不能] @@] (あいづち)

51 J35 : なるほど。= (あいづち)

52 J34 : へえー (あいづち)

53 J35 : それは、ちょっと慣れるまで、(先取り発話)

54 J43 : けっこうきついですね。

55 J35 : きついで [すね。] (繰り返し)

56 J34 : [おー、] おーお。(あいづち)

03 行で、理系の院生 J43 が大学に入学した時、まわりの学生は他人とのコミュニケーションに興味がなくパソコンが友達みたいな人が多く、戸惑った体験談を語っている。すると 09 行目で聞き手である J35 が、「若干思ってたのと違ったみたいな」と当時の J43 の気持ちを推測した発話をしている。また続いて J34 も「ちょっとおかしかった。」と当時の J43 の気持ちを推測した発話を行っている。ここでは聞き手二人が先取りする形で話し手 J43 の心の「声」を引用しているのである。Tannen (1989) 言うところの創作対話が行われている。この「声」に応答する形で、10 行目以降 J43 は更なる発話をし、まわりの学生の様子が衝撃的で、「こいつ何しゃべりかけたら俺に話しかけてくれんだろう、みたいな」と当時の自分の心情を引用して語っている。続いて、20~21 行目で J35 が内容に関連した質問「それでけっこう初めー、その、なんか学科というか、そんなの間では一、友達が、作りにくかった感じですか？」をして更なる語りを引き出そうとしている。この質問に答える形で J43 はさらに話をし、「隣に席になったやつは、もうほんとにパソコンと友達みたいな人で」とクラスメートの話をすると、37 行目で J35 が「パソコンとしゃべってるから話しかけないって @@話ですか？」とあたかも自分がそのときその場所にいたように当時のクラスメートの様子を示す発話をしている。当時のクラスメートの「声」の引用であり、虚構的・

擬似的な声である。ここでも Tannen (1989)が言うところの創作対話が行われている。聞き手が先取りする形で、第三者（当時のクラスメート）の「声」を引用しているのである。聞き手による「声」の引用は、聞き手が話し手の語りに共感していることを示すと同時に、聞き手が語りの構築に貢献していることになる。この「声」に対応する形で、J43 は当時のクラスメートに食事に行かないかと誘っても反応がなかったことを述べている。すると 44 行目で J34 が「パソコン？」と食事に興味のない級友の関心はパソコンにあるのだなと先取り発話をしている。それが引き金となって、J43 は食事と一緒にいくことには関心を示さなかったそのクラスメートがパソコンの話になると乗ってきたことを話している。

これら一連のやり取りを見ると、入学当時のまわりのクラスメートたちがパソコンおたくで自分とコミュニケーションを取ることに全く関心がない様子に出会って戸惑ったと話す J43 の語りを、聞き手である J34, J35 があいづちだけでなく、質問、先取り発話、「声」の引用などによって J43 の語りをさらに促していることがわかる。いわば三人で一つの語りを展開しており、トピックを発展させていると言えるだろう。このように一つのトピックが発展している会話というのは、聞き手がただあいづちをうつのではなく、話し手の話す内容を予測したコメントやその場にいなかったにもかかわらず当時の話し手の心情を表すコメントをして、話し手の話に理解や関心を示しながら、ともに語りを作っていることがわかる。

上記の会話は、J43 の体験談すなわち理工系大学での同級生とのコミュニケーションの取り方の難しさがトピックであるが、この会話後、トピックは J35 が美大生である自分の体験談、すなわち美大生特有のコミュニケーション・スタイルからくる難しさについて話をしている。その後、J34 がコミュニケーション専攻の院生たちの間のコミュニケーションを取る難しさについて語っている。すなわち、J43 の first story に触発されて J35 の second story が始まり、次に J34 の third story が続いている。J43 の first story の展開において聞き手である J34, J35 の関与があり、トピックが発展するとともに、J43 の語りへの共感が次の second story, third story と繋がっている。聞き手からの second story, third story そのものが、話し手への共感を示していると言えるだろう。

#### 5. 4 トピックが発展しない日本語会話の例

以下の日本語会話 JP73 は、聞き手の関与が少なくトピックが発展しなかった例である。

(6) 日本語会話 JP73 からの抜粋

- 01 J39 : けっこう、とお、あの僕出身はあの東京都じゃなくて、あの＝  
 02 J35 : =はい。＝ (あいづち)  
 03 J39 : =大分、あの九州のほうなんです [けど、1]  
 04 J33 : [へえ。1] (あいづち)  
 05 J35 : [ああ。1] (あいづち)

06 J39: その、こっち来て思ったんですけどけっこう、なんか私立と公立の、格差が、  
07 か、けっこう激しいな、[っていう。1]

08 J35: [うーん。1] = (あいづち)

09 J33: =ああ、そうかもしれないです。(あいづち、肯定のコメント)

10 J39: [感じ1]

11 J35: [そうですね。1] (あいづち)

12 J39: なんかも、ほんと荒れてるところはほんとに荒れててなんか、

13 J39: うん。(あいづち)

14 J39: びっくりす、するとか。

(2)

15 J39: ご出身は皆さん、東京

上記会話 JP73 は大学院生3人の会話だが、塾講師のバイトをやっている J39 が生徒を教える苦労話を語った後で、01,03, 06~07 行目で、自分は東京出身でないのだから知らなかったのだからと前置きして、東京の私立と公立(高校)の格差が激しいことに驚いたと述べている。彼の出身の九州ではおそらく公立高校が一番の進学校なのだろう。それに対して東京都ではトップの進学校は私立高校で、都立高校とは差があること、高校間で格差があることを知り驚いたのだと思われる。この発言に対して、聞き手である J35 と J33 は 08,09 行目であいづちをうつだけでコメントもしていなければ、なぜ J39 がそう思ったのかと尋ねる質問もしていない。12 行目で J39 が「なんかも、ほんと荒れてるところはほんとに荒れててなんか」とさらに発言を続けているが、それに対してもあいづちをうつだけである。その後2秒ポーズが入り、トピックは J33, J35 の出身地や彼らの高校が私立だったのか公立だったのかという話に移る。

東京の高校に格差があり、荒れている高校は荒れているというのは、大きな社会問題であり、教育・社会・経済など様々な観点から議論できるトピックである。しかし、ここでは J39 の感想に終わってしまって、トピックが全く発展せず、次の話題に移っている。J39 は驚いたという感想を述べるだけで、この格差問題について自分の考察などトピックについて掘り下げるようなことを言っていない。同時に聞き手の J33, J35 も J39 が出した問題に対してあいづちをうつだけで、コメントや質問をすることもなく、自分の意見を述べることも全くしていない。いくらでも発展させることのできるトピックであっても聞き手側からの関与がなければトピックは発展することは難しく、その結果次のトピックへと変わるのである。

#### 6. まとめ: トピックが発展するために必要な聞き手からの関与

上記の分析結果からわかることは、英語会話においても日本語会話においても、トピックが発展するためには、聞き手の役割が大きいということである。トピックが発展している会話では、聞き手は話し手の語りに共感を示しながら様々な方法でトピックの発展に貢献している。共感を示す方法としては、あいづちや笑いがあるが、トピ

ックが発展している会話に共通してみられるのは、あいづちや笑いだけでなく、内容を予測した先取り発話コメントを行い、関連ストーリーを語り、話し手が語る話題の現場に実際はいなかったのにまるでその場にいたかのように話し手や第三者の「声」の引用をして話し手と擬似的対話を構築することなどである。これらの聞き手の言動は、聞き手から話し手の語りへの共感を示し、また同時に語りの構築に聞き手が貢献していることを示す。また話し手が語る first story に触発されて聞き手が話し手となり second story や third story を語ることも聞き手から話し手への共感を示すことになる。

質問も聞き手からの関与としての働きがあるが、アメリカ英語会話 U40 が示すように、短い表面的な質問はトピックの発展に貢献しないと思われる。トピックの発展のためには、UK57 に見られるように聞き手側からの相手の話に踏み込んだ質問が必要だと思われる。トピックが発展している会話を見ると、日本語会話でも英語会話でも聞き手が上記のような方法で積極的に関与し、話し手と一緒にトピックを発展させていることがわかる。

最後に本研究の英語教育への示唆について考察したい。本研究により英語会話においてトピックが発展するためには、聞き手の役割が大きいことがわかった。英語教育においても話し手としてのスピーキング能力育成だけでなく、聞き手として会話にどう関与するのかを教えていく必要があると思われる。あいづちをうつだけでは聞き手の関与として不十分である。話し手のトピックに関連した質問やコメントを行う、先取り発話を行う、話し手や第三者の「声」を引用する、関連ストーリーを語るなどの聞き手としての関与ストラテジーをどこでどう行うのかを一つ一つ丁寧に教えていくことが不可欠であると思われる。

#### 注

- 1 アメリカ英語・イギリス英語・オーストラリア英語に共通する話題の展開や会話スタイルを調べるため、三か国でデータを収集した。
- 2 収録した会話は全部で約 80 本あるので、会話と会話参加者には収録した国ごとに通し番号を付けている。

#### 謝辞

本研究は科研費基盤研究(c)「日・英語の話題展開の手法：円滑な英会話のための社会言語能力の育成に向けて」(研究代表者 大谷麻美)の助成によって行われた。ここに記して謝辞を表す。

#### 文字起こしの記号

[聞き取り不能] 聞き取り不可能な箇所

[ ] 重複発話を示す。

[ ]

- [ 1] 発話の重複が続くとき、数字は同じ数字の発話が重なることを示す。  
[ 1]  
@ 笑いを示す。( @の数が多いければ笑いの長さが大きい)  
(.) (1秒未満のポーズを示す) ポーズを示す。( )内の数字は秒数を示す。  
= 二つの発話が途切れなく密着していることを示す。  
< > 非言語的動作を示す。

#### 参考文献

- Duranti, A. (1986). The audience as co-author. Special issue of *Text*, 6(3), 239-248.
- Goodwin, C. (1979). The interactional construction of a sentence in natural conversation. In G. Psanthalas (ed.) *Everyday language: Studies in ethnomethodology*. (pp.97-121). New York: Irvington Press.
- Goodwin, C. (1984). Notes on story structure and the organization of participation. In M. Atkinson & J. Heritage (Eds.) *Structures of social action*. (pp.225-246). Cambridge: Cambridge University Press.
- 井出里咲子 (2013) 「ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性」 佐藤彰・秦かおり (編) 『ナラティブ研究の最前線』 (pp.43-63) ひつじ書房
- 岩田祐子(2015a) 「日・英語初対面会話における自己開示の機能」 津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子著 『日・英語談話スタイルの研究—英語コミュニケーション教育への応用』 (pp. 37-91) ひつじ書房
- Iwata, Y. (2015b, March). Self-disclosure as a Pragmatic Indexical in English and Japanese Conversations. Paper presented at a joint conference of the AAAL & ACLA/CAAL, Toronto, Canada.
- Iwata, Y. (2015c, July). Storytelling as social and cultural practice: self-disclosure in English and Japanese first-encounter conversations. Paper presented at the 14th International Pragmatics Conference, Antwerp, Belgium.
- Lerner, G. (1992). Assisted storytelling: developing shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology* 15(3): 247-271.
- Mandelbaum, J. (1987). Couples sharing stories. *Communication Quarterly* 35(4): 144-170.
- Manzoni, C. (2005). The use of interjections in Italian conversation. In U.M.Quasthoff & T. Becker (Eds.) *Narrative interaction*. (pp.197-220). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Mulholland, J. (1996). A series of story turns: intertextuality and collegiality. *Text* 16(4): 535-555.
- 三牧陽子(1999) 「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性—異学年大学生間の会話の分析—」 『日本語の地平線』 (pp.363-376) くろしお出版

- Sacks, H. (1974). An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In R. Bauman & J. Sherzer (Eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*. (pp.54-69) Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中妙子 (1998) 「会話における〈先取り〉について」早稲田大学日本語研究教育センター紀要 10, 17-40
- Tannen, D. (1989). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.